

# 台湾と日本の架け橋： 台湾個人旅行客緊急手術を経験して

函館市医師会  
函館五稜郭病院

こう 黄  
まさよし 仁謙

ゴールデンウィークの直前に、台湾からの個人旅行客が急性腹痛で当院を受診し、結果的に急性虫垂炎の診断で緊急手術を受けました。北海道医師会会員の皆様にも少しでも、役に立てられる情報を提供できればと思います、今回の経験を投稿させていただきました。

私は昭和37年生まれで、15歳まで、台湾の台北市で過ごしました。諸事情により、日本に渡り、大樹町で高校生活を送ったあと、運良く昭和57年に旭川医科大学医学部に入学できました。卒業後、旭川医科大学附属病院、市立稚内病院、天理よろづ相談所病院を経て、平成5年7月より、函館五稜郭病院で勤務しております。高校生以降、日本で暮らしており、中国語はできますが、中国語の医学用語を駆使して、患者様に詳細な説明は難しい状態です。

函館市は観光都市として、多くの旅行客が来訪いたします。急に体調を崩され、医療機関を受診される方は時々おられます。今回、台湾から北海道に旅行で来られた一家で、小学生のお子様で急性腹痛で受診された。小児科外来で小児科の先生やスタッフと患者の家族がお互いに片言の英語、タブレット翻訳を駆使して、病歴聴取、診察、採血、画像検査を行った。この時点で急性虫垂炎疑いの診断となった。たまたま、孫の予防接種のために、小児科外来に来ていた息子が声をかけられ、困っている外来スタッフや小児科の先生に、中国語が分かる自分の父親に相談したらと提言したので、私に連絡がきました。最終診断のために、造影CT検査が必要となり、検査の説明、造影剤による合併症の説明に難渋しておりましたところで、私が小児科外来に到着しました。なんとか、説明をしましたが、とても十分に説明できたとはいえない状況でした。最終確定診断は急性虫垂炎で、一部壊疽化の疑いがあり、緊急手術が必要と考えられたが、3日後の帰国便を予定していたので、治療方法の選択肢を外科の先生から説明をいただき、大まかの内容を私がお家族に通訳して、家族で再度検討していただきました。

いろいろと悩まれたあと、最終的には、緊急手術に同意をしていただき、私から麻酔の説明、外科の先生から手術の説明（このとき、私が席をはずれていたが、患者家族のお知り合いで、テレビ電話による通訳が行われた）をして、手術を実施しました。術後は患者の母に付き添いをしていただき、病棟スタッフの頑張りでも、徐々に回復して、帰国予定を1

日遅らせて、台湾に帰国できた。その間、休日返上で、毎日病棟回診をして、外科の先生や病棟スタッフのお手伝いをさせていただきました。患者やその家族がまったく、言語がわからないまま、入院していたよりも、多少不十分でも、言葉が通じる私の存在は役に立ったのではないかと考えております。

以下、外国人患者の受入れのための医療機関向けマニュアル（第4.0版）より抜粋。

「外国人患者の方の中には、日本語でのコミュニケーションが困難な方も少なくありませんし、宗教や医療習慣・医療文化の違いを踏まえた上での対応が必要になってくる場合もあります。特に訪日外国人旅行者患者の方の場合には、医療費の支払い等をめぐって公的医療保険の対象となる日本人患者や在留外国人患者の方とはまったく異なる事務対応等が求められる場合もありますし、医療搬送等をめぐってこれまで医療機関が経験したこともない関係者との連携や対応が必要となってくる場合もあります。そのため、医療機関において、こうした状況に対応し、外国人患者に対して安心・安全な医療を円滑に提供するためには、自院の状況や機能、役割等に応じた外国人患者の受入れ体制を整備していくことが重要となります。また、こうした体制整備は、外国人患者だけではなく、自院の職員の外国人患者受入れに関する負担や不安の軽減やトラブル防止等にもつながります」

当院も日本政府観光局（JNTO）ウェブサイトで開催されている「外国人患者を受け入れる医療機関リスト」に掲載されており、当初外国人患者受け入れの準備を事務方で行われたが、実際には現場での運用が手探り状態になっており、今後は各種のマニュアルを参考に、さらによりよい対応を提供できるように整備できればと期待しております。

## 参考資料

- ・「外国人患者の受入れのための医療機関向けマニュアル（第4.0版）」令和3年3月31日発行
- ・「新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付け変更を踏まえた外国人患者受入れに関する体制の整備について」令和5年4月28日事務連絡
- ・「外国人患者受入れ情報サイト」  
<https://internationalpatients.jp/>
- ・「北海道における外国人患者受け入れに関する対応指針」平成31年（2019年）4月作成